

Title	シンメトリーとイレギュラリティー 第II部 イレギュラー・シンメトリーの展開：19世紀アメリカ建築の構成的課題
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	日本建築学会計画系論文報告集. 1985, 351, p. 102-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26606
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

シンメトリーとイレギュラリティー

第Ⅲ部 イレギュラー・シンメトリーの展開

—19世紀アメリカ建築の構成的課題—

正会員 藤 田 治 彦*

1. 「イレギュラー・シンメトリー」と造形的多様性

相称的建築形態への不規則性の導入である「イレギュラー・シンメトリー」は、ダウニング（第Ⅰ部参照）によれば、ひとつの中心部がその両側のふたつの同大異形部を視覚的にも繋いだ相称的全体性ということで、第Ⅰ部では文字通り「左右非相称」の1850年代までの数例を検討したが、第Ⅱ部ではその原理または手法の立体的展開である「前後左右非相称」などからの、19世紀後半における、米国公共建築の構成上の発展を扱う。

前後左右に渡る非相称、すなわち、どの立面も左右相称ではない建築物の近代アメリカの例としては、デイヴィス（第Ⅰ部参照）により1838年にニューヨーク州タリータウンに建てられたポールディング邸が、東西南北すべての立面がダウニングの「イレギュラー・シンメトリー」になる、顕著なものだった¹⁾。左右相称を崩し変化を与える手法がある立面でのみ観察されることはまれだが、スミスソニアンのように細長く規模の大きな建築物では観面の重要度に差があり、実際そうであるにもかかわらず、前後左右の非相称とは言い難い。それに比べ、正方形に近い平面をもつ中規模の公共建築や、ふたつのファサードが一目で把握できる街角の商業建築物には、各立面を非相称にすることによって建物全体を複雑多様なものにする図式的な手法が現れもした。

前後左右の「イレギュラー・シンメトリー」を代表するのがウィーロック（Merrill G. Wheelock, 生没年不詳）により1867年にボストンに建てられたマソニック・テンプルだった。上部はフリーメイソンの集会場等だが、下階にテナントを容れた中世風のこの建物は、四角い一般的な都市商業建築の類型に属するゆえ、それぞれに形の異なる角の張出しと尖塔および窓割り等が、異常に人工的な組み合わせとなった（Fig.1）。同年の競技設計の結果ウィンドリム（James H. Windrim, 1840-1919）によって建てられたフィラデルフィアのマソニック・テンプルは大小の双塔を正面に持つ中世教会風の建物で、

やはり「イレギュラー・シンメトリー」の観点から興味深い。現存するこの建物は、すべての石材加工を建築現場ではなく石切り場で行うメイソンの伝統に従って作られたと言われ、奇異なまでに複雑な形態には、彼らの石工技術と歴史的な神秘性を示す役割も担われたであろう。これらのマソニック・テンプルの異様な形態は、彼らの建築意図が新奇性と多様性を求める当時の傾向により、特殊な形で強化された結果であると思われる。

文教施設の「イレギュラー・シンメトリー」は複合的なプログラムを統一した建築形式に納める際に形成されることが多いが、単純な内容に複雑な外形を与えることもあり、ワーナー（Andrew J. Warner, 生没年不詳）によるニューヨーク州ロチェスターのフリー・アカデミー（1872-1873）はその典型である。ここでは、主要階すべてが直交2軸に関するほぼ完全な相称的平面で計画されながら、その四隅のパヴィリオンは、ひとつが寄棟、もうひとつが切妻、残りふたつはマンサード型の小屋根を冠し、それぞれ異なった造形的扱いをされている（Fig.2）。

以上のような造形的多様性の追求は、「イレギュラー・シンメトリー」の立体的な展開であり、手法の拡大でもあるが、結果としての不自然さは、それらが真に立体的な対象の把握によるものではなく、あくまでも正面と側面という投象源に引き戻される平面性による。換言すれば、それらは、その約20年前にダウニングが示した、素朴な「イレギュラー・シンメトリー」の直接の系譜上にあると言える。

2. アメリカの公共建築における非相称形態の展開

19世紀も後半になると、「イレギュラー・シンメトリー」の形態が多様化するとともに、それが適用される建築物の種類も多様になる。1850年代までに現れた、それらの公共建築物のほとんどは文教および宗教施設であり、歴史的な欧州の大学や修道院そして教会等との直接的連合が作用したことが多いと思われる。ところが、1850年代中頃になると、「イレギュラー・シンメトリー」とは言わぬまでも、平面の中心軸外に単塔を建て、非相称の構成をとる市役所や裁判所などが現れ、徐々に各種

* 京都工芸繊維大学 助手・学博
（昭和58年11月22日原稿受理日、昭和60年1月23日改訂原稿受理日、討論期限昭和60年8月末日）

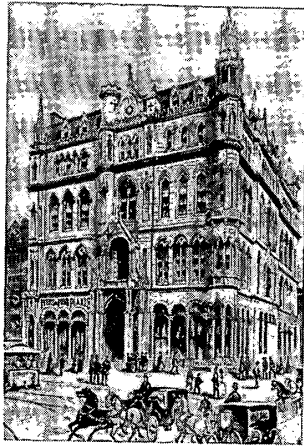
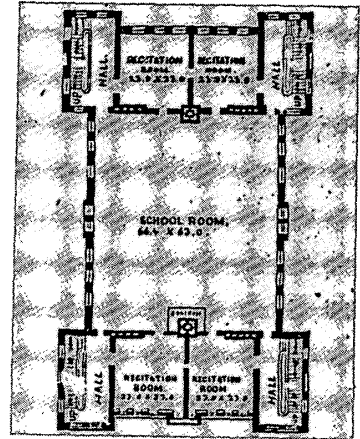


Fig. 1 M. G. Wheelock, Masonic Temple, Boston, 1867 (Dover Publications, Inc.).



Fig. 2 A. J. Warner, Free Academy, Rochester, 1872-1873 (courtesy of Rochester City School District).



公共建築へと拡がり、1860年代には、「イレギュラー・シンメトリー」を含むさまざまな非相称的形態が、かつてはシンメトリカルな古典的イメージが独占していたところでも採用されるようになる。そこには中世末期のイタリーのパラッツォ等を参照したものもあるが、独自のもの、または異種の建築形態を取り合わせた例も多く、特定の歴史的連合は弱まったと言えよう。

司法行政関係の建物にもスミスソニアンの影響は強く、インディアナ州で多くの公共建築物を手掛けたメイ (Edwin May, 1824-1880) の非相称的デザインに顕著な形で現われ、グリーンズバーグのディケイター郡裁判所 (1854-1860) からヴィセンズのノックス郡裁判所 (1872-1876) まで、終生に渡るものとなった。ペンシルヴァニア州ではスローン (Samuel Sloan, 1815-1884) がいくつかの非相称的公共建築物を残しているが、彼は非相称を建築正面の構成法として安易に使う傾向があった。例えば、三角破風の古典風ファサード上の両端に高さの異なる塔を冠したフランクリンのヴェナゴ郡裁判所 (1868-1869) は、ロック・ヘイヴンのクリントン郡裁判所 (1867-1869) とほぼ同一のデザインにより、両端の高い塔と低い塔の左右関係と詳細のみを変えたものである (Figs. 3, 4)。スローンの場合、建築物自体からはスミスソニアンの影響を断定できないが、1852年に出版された彼の著書にはオーエン (第I部参照) の *Hints on Public Architecture* が引用され、レンウィック (第I部参照) 風の図版も登場し、やはり何らかのスミスソニアンとの関係は否定し難い²⁾。

このように、地方裁判所の建物における非相称形態の使用は19世紀後半を通じて試みられ、マサチューセッツ州スプリングフィールドにリチャードソン (Henry Hobson Richardson, 1838-1886) によって建てられたハンプデン郡裁判所 (1871-1874) の左右相称のファサ-

ドの一端に大きなバルコニーを付けた構成も、その試行の一部である。この裁判所は、ロチェスターのフリー・アカデミーと同じ程に相称的な平面を持つだけに、その非相称の正面には奇妙さが伴う (Fig. 5)。

スプリングフィールドでは、1821年に建てられた旧裁判所はギリシア神殿風の相称的な建物だったが、上記のリチャードソンによる裁判所の以前にも、アイドリッツ (Leopold Eidlitz, 1823-1906) がロマネスク風の市庁舎 (1854-1855) を正面の片側にのみ塔を有する形で建てており、他の米国諸都市でも非相称的形態の公共建築物は増加しつつあった。

以上のように、19世紀中頃から1870年前後にかけての非相称的公共建築には、欧州からの影響は無視できないが、アメリカ独自の地方的展開があった。それに対して、1870年代以降は、英国のクイーン・アン・リヴァイヴァルと呼ばれたものが非相称的形態と分かち難く連合され、その1880年代の拡大はリチャードソン無しには考え難い。



Fig. 3 S. Sloan, Clinton County Court House, Lock Haven, 1867-1869 (H. Fujita).

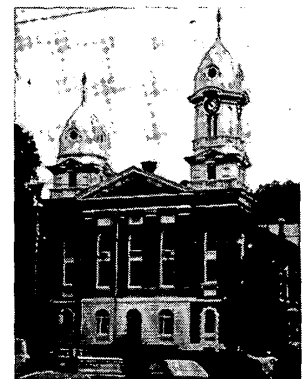


Fig. 4 S. Sloan, Venango County Court House, Franklin, 1868-1869 (H. Fujita).

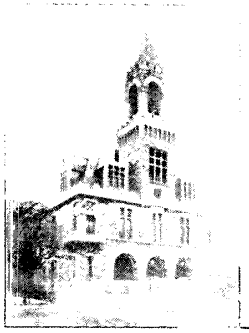


Fig. 5 H. H. Richardson, Hampden County Court House, Springfield, 1871-1873 (Vogel, *Das Amerikanische Haus*, Wasmuth Verlag, Berlin).

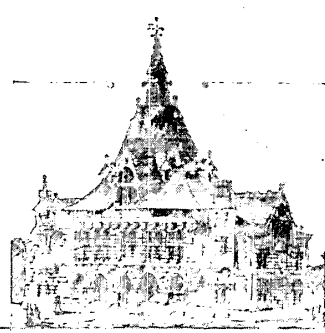


Fig. 6 H. H. Richardson, Brookline Town Hall Project, 1870 (Van Rensselaer, *Henry Hobson Richardson and His Works*, Dover Publications, Inc.).

3. リチャードソンの建築における「イレギュラー・シンメトリー」

リチャードソンによる初期の教会建築は、すべてが身廊の軸線を外れた位置に塔を置く非相称型だが、1860年代も後半の米国東部では、特に稀なものではない。したがって、現存するリチャードソンによる非相称的建築物で注目される最初の作品は、すでに述べたスプリングフィールドの裁判所になるが、単なる非相称ではなく、ダウニングの唱える、明確な中心と両翼とから成る左右相称でありながら詳細において左右の異なる「イレギュラー・シンメトリー」の典型としては、1870年のブルックライン・タウン・ホール計画が挙げられる。尖塔を戴く急こう配の大屋根の左右で、一方は煙突の類、他方は小塔状の張り出し等と、詳細は異なりながらも輪郭の相称性を保ったブルックライン・タウン・ホールの構想図

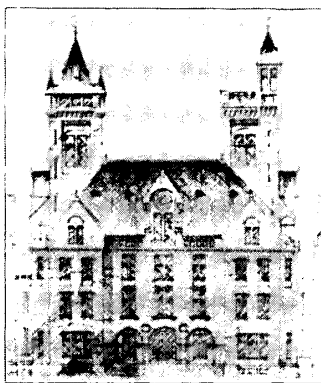


Fig. 7 H. H. Richardson, State Hospital, Buffalo, Administration Building, Elevation Study, 1871 (Houghton Library, Harvard University).

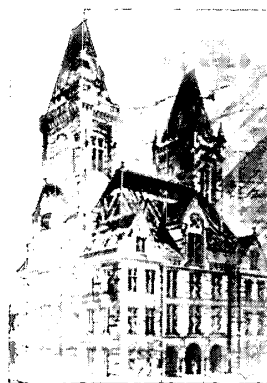


Fig. 8 H. H. Richardson, State Hospital, Buffalo, Administration Building, Perspective Study, 1871 (Houghton Library*).

* Album deposited by Shepley, Bulfinch, Richardson, and Abbott, Inc., Boston.

は、ダウニングが *Cottage Residences* の中でシンメトリーの説明に用いた「イレギュラー・シンメトリー」の住宅の挿図に、公共建築の分野で相当する (Fig. 6)。これは実現されなかったが、スプリングフィールドの裁判所や次に述べるニューヨーク州バッファローの精神病院の管理棟を始め、リチャードソンの1870年代における「イレギュラー・シンメトリー」からの建築的展開の基礎となるものである。

1870年代初めに設計されたバッファローのニューヨーク州立精神病院は、ほぼ同一の男女病棟が中央の管理棟から各5棟、おおむね北東と西の方向へ相称形を成して雁行する、巨大な建築群だが、その左右相称の中心となる管理棟に非相称形態が考えられていた³⁾。巨大な塔が左右相称に並ぶ実施案に至る前に、その中央管理棟には、形の異なるふたつの塔が考えられ、それ以前には単塔が計画されていたことは、ヒチコック (Henry-Russell Hitchcock, 1903-) も示すところだが、また別な左右非相称の双塔のデザインがハーヴァード大学ハウトン図書館所蔵の写真に含まれ⁴⁾、リチャードソンがさまざまな非相称形態を管理棟に検討していたことが窺われる (Figs. 7, 8)。また、両非相称案を比較すると、左右の塔は入れ替えられた恰好であり、その非相称は実際上の理由によるのではなく、視覚的均衡を保ちながら相称を崩そうとする純粹に造形的な操作によると思われる⁵⁾。

バッファローの州立精神病院の場合と同様に、ボストンのトリニティ教会も、コプリ・スクエアに面する現在の相称的ファサードに落ち付くまでに、左右非相称の案を経ている。ニューヨーク州立精神病院に非相称の意匠を提案した1872年の作図になるリチャードソンのトリニティ教会西側正面の草案は、その精神病院管理棟にも通じる、建物の上部で左右の詳細を違えた非相称形態を示す。ただし、この場合は相異が余りにも微妙なので、複数の試案が単一図面上で検討された可能性も残る。それに対して、1873年7月の案は、より明確な非相称の正面を持っていたことが透視図からも理解される。この非相称形態には実際的理由があり、車寄せを設けたために正面の南側が大きく変形されたと言える。だが、実施案に近い左右相称形となった同年9月の案では正面南側の車寄せは消失しており、それが実際に要求されたものか、非相称の正面を作るために考え出された理由なのかは断言し難い。

リチャードソンの建築に非相称形態が多いことは指摘するまでもないが、以上に示したように、その非相称は、英仏の新たな影響を示しながらも、19世紀アメリカ建築の一貫したテーマである「イレギュラー・シンメトリー」の展開であることは注目されるべきであろう。

4. 装飾的非相称から建築的非相称へ

ボストンのトリニティ教会により米国の指導的建築家としての地位を確立する1870年代中頃までに、リチャードソンは多くの非相称的建築形態を実作および習作に残しているが、いくつかの住宅と小規模な教会を除けば、それらは装飾的な詳細のみが相異なる「イレギュラー・シンメトリー」で、真に建築的な非相称に発展するのは、それ以降のことになる。その変化を同種の建築に求めるならば、例えば、1872年に設計され翌年シカゴで着工したアメリカン・マーチャント・ユニオン・イクスプレスの建物から、1875年にコネチカット州ハートフォードの絹物商シェイニーのために設計され翌年竣工した建物への発展に見られる。しかし、その発展の基礎となる、建築の内容と表現の一致という理念の追求は、パリから帰国後間も無い頃の、多少未熟な商業建築物の設計にも、未解決な試行としてすでに表れている。

1867年のエクウィタブル生命保険ニューヨーク社屋の競技設計では、ギルマン (Arthur D. Gilman, 1821-1882) とケンデル (Edward H. Kendall, 1842-1901) による案が選ばれ、別案を提出していたポスト (George B. Post, 1837-1913) の補佐を得て、後の高層商業建築の発展の基礎となるものがブロードウェイに建てられるが、その競技設計にはリチャードソンも参加していた。彼の案はギルマンらによる当選案にも似て、ポストの案には酷似するマンサード屋根を冠したフランス風中層建築だが、その窓割りは各ファサードともシンメトリーを保つ他の応募案と微妙に異なる。不等辺矩形の敷地一杯に計画されたこの建物のシーダー・ストリート側の主要出入口空間に呼応して相称を崩している。だが、その非相称は、シーダー側ファサードのブロードウェイに近い窓の縦1列を残りの窓から引き離し、窓枠の意匠を変えたのみで、内部の不規則性を機械的に覆った他の応募案の相称形態よりも結果的に優れたものとは言いがたい。

事務所建築物のように標準的形態に支配され勝ちな商業建築におけるリチャードソンの手法の発展は、他の領域では相当な展開を見る1870年代前半でも少なく、エクウィタブル応募案よりも無難に纏められた相称的ファサードの建物が東部諸州に記録されている。やはりすでに取り毀されたシカゴのアメリカン・イクスプレスの段階になると、大胆な非相称が試みられるが、それとて最上層のマンサード部での限られた非相称に過ぎない。ただし、それが「イレギュラー・シンメトリー」の適用で、公共建築におけるハンブデン郡裁判所に相当することは注目される⁶⁾。

メイン・ストリートに面し、北側の角に切妻型の屋根南の角はピラミッド型の屋根を冠した左右非相称のコーナー・パヴィリオンを持つ商業建築物として計画されたハートフォードのシェイニー・ビルディングも「イレ



Fig. 9 H. H. Richardson, Cheney Block, Hartford, 1875-1876 (Houghton Library, Harvard University*).



Fig. 10 “un bâtiment carré”, Viollet-le-Duc, *ENTRETIENS SUR L'ARCHITECTURE*, I, Paris, 1863.

*Album deposited by Shepley, Bulfinch, Richardson, and Abbott, Inc., Boston.

ギュラー・シンメトリー」の応用だが、その非相称性は屋根の形態には停まらず、下階にまでおよんでいる。後に北側角の切妻型屋根は陸屋根に変更され、この建物はさらに建築的な非相称形態を示すことになる。すなわち、まず、上記の切妻屋根を取り除き、目に入る小屋根は南側のピラミッドだけにすることにより、ロチェスターのフリー・アカデミーを典型とする多様性のための多様な形の追求を放棄し、同時に、より位置的に重要な南西角の視覚的価値を相対的にさらに高めることにより、その非相称を装飾的なものから建築的で周囲の街並や地形と相互に作用し合うものへと向けて実現しつつあった (Fig. 9)。

建築物のコーナー・パヴィリオンを高い塔や特異な意匠で強調する手法は米国でも殊に珍しいものではなくなっていたが、シェイニー・ビルディングの場合は、それが異常な規模や形態で人目をひく付加物ではなく、敷地等の不規則な諸条件の中に置かれる立体としての建築物に均衡をもたらす不可欠なものとして全体を統御している。これに類することを、ヴィオレール・デュク (Eugène-Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879) は建築物の全体から詳細にまで渡り、彼の建築講話第一巻 (1863) の最後で論議しているが、それは非相称的な建築物にも、敷地等の諸条件に応じた構築と人間の知覚と

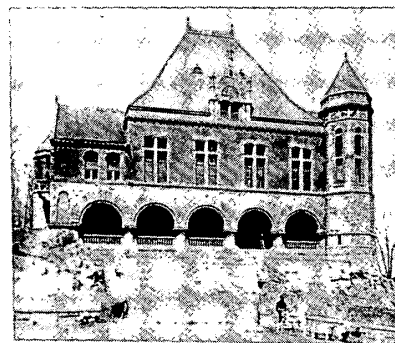


Fig. 11 H. H. Richardson, Ames Memorial Town Hall, North Easton, 1879-1881 (Dover Publications, Inc.).

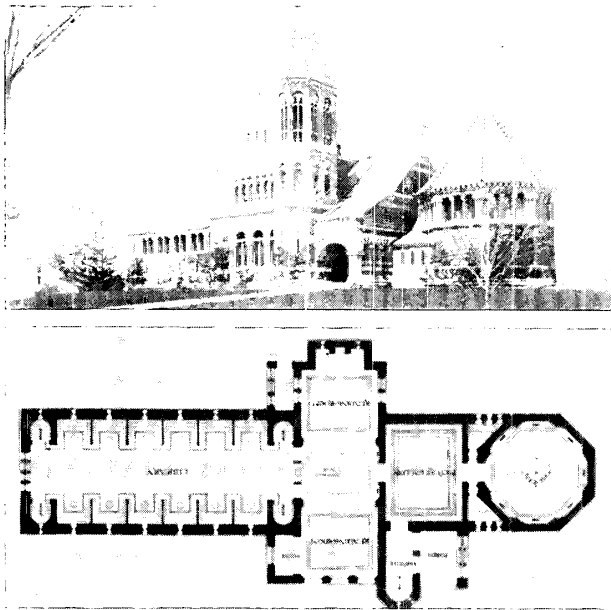


Fig. 12 H.H. Richardson, Winn Library, Woburn, 1876-1879, Exterior and Plan (Van Rensselaer, *Henry Hobson Richardson and His Works*, Dover Publications, Inc.).

いう基盤から、相称 (symétrie) 法則の限界を超えた均衡 (pondération) という原理の下に、合理的解釈を与えようとする試みでもあった⁷⁾。起伏のある敷地に建つ正方形平面の建築物の何処に望楼を設けるかという例でヴィオレール-デュクが論じた「均衡」(Fig. 10)を具現するのが、リチャードソンの公共建築では、マサチューセッツ州ノース・イーストンのエイムズ・メモリアル・タウン・ホール (1879-1881) である。一番低い所に巨大な塔を置くことにより傾斜地における建築的均衡を計ったこの矩形平面のタウン・ホールの、その原型である「イレギュラー・シンメトリー」のブルックライン・タウン・ホール計画案からの変化は、両者を隔てる10年間のリチャードソンの非相称的建築構成における内容の変化を明示している (Fig. 11)。

シェイニーの建物や上記のタウン・ホールにおける非相称的形態は、皮相なヴィクトリア的気紛れとしてヒチコックにより批判されたが⁸⁾、そこにリチャードソンやヴィオレール-デュクを含む当時の中世主義者たちが、古典的なシンメトリーを超え、非相称をも許容する均衡の原理を通じ、近代的建築課題に向う過程を見落すべきではない。

リチャードソンにおける建築的相称の成熟過程は、1880年前後の一連の図書館建築に観察される。それらのすべては、文化芸術への興味や知的欲求の急速な成長に応じた当時の公共図書館建設運動のなかで、個人の遺贈等によって建てられた比較的の小規模な地方図書館ではあるが、遺贈者の収集になる美術品の展示室等を含み、地方の文化センターとしての色彩の濃いものであった。

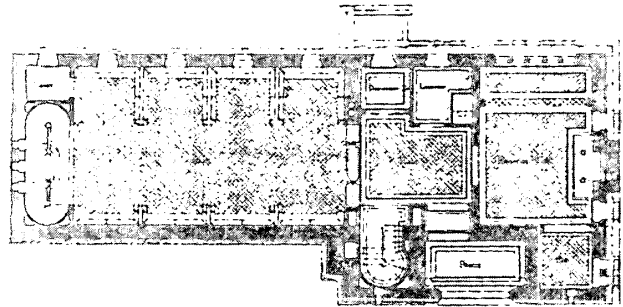
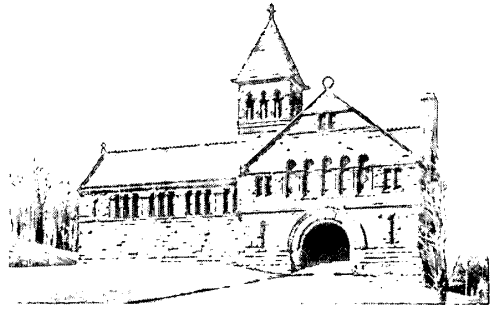


Fig. 13 H.H. Richardson, Ames Library, North Easton, 1877-1879 (*Monographs of American Architecture*, III, Ticknor and Company, Boston).

したがって、すでに検討した学校建築の例にも似て、この種の図書館は、多様なプログラムを個人が郷土に遺す文化施設としての控目な記念性の下に纏めることが期待され、類型的にも「イレギュラー・シンメトリー」からの発展の系譜上にある。

マサチューセッツ州ウォーバーンのウィン記念図書館 (1876-1879) からリチャードソンの連作が始まるが、これは英仏両建築文化の影響を、混合あるいは妥協させるのではなく、局面を変えて併存させたものである。固有の性格を形態に表す個々の空間が交差軸上に連続的に、しかも妥協なく、展開する平面がリチャードソンのフランスにおけるアカデミックな修練によるとすれば、形態も色彩も激しいほどに豊かで多様なその姿は、いわゆるハイ・ヴィクトリアンの影響を物語る。ほぼ相称的とも言える単純な平面からは想像し難い複雑な形態を示すこの建物の形成法は、米国ではデイヴィスやダウニングが唱導し始めた小規模ながらピクチャレスクな住宅のそれに近い (Fig. 12)。

ウィン図書館に続くノース・イーストンのエイムズ図書館 (1877-1879) は、読書室を中心とする近似正方形平面の主要部に長矩形平面の図書室部が付く基本構成を持ち、左右相称や非相称とは別な構成概念によっても把握される。しかし、同じ傾斜地に、同じ敷地の低い側に重心を置いて建てられる既述のエイムズ記念ホールとの構築的理念における類似性や、ウィン図書館との平面計画上の連続性を考えれば、やはり「イレギュラー・シンメトリー」を基本にするものと観るべきだろう。これは主要アプローチからエイムズ図書館に向う場合に、

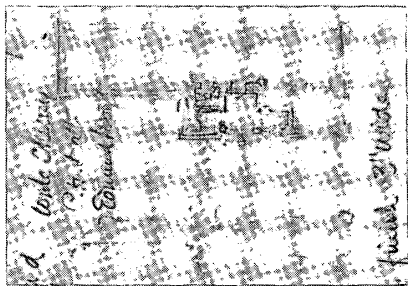


Fig. 14 H. H. Richardson, Crane Library, Quincy, 1880-1883, Sketch Design (Houghton Library, Harvard University).

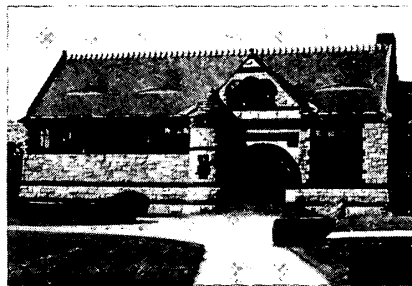


Fig. 15 H. H. Richardson, Crane Library, Quincy, 1880-1883, Exterior (H. Fujita).

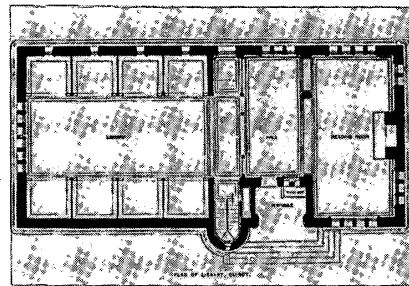


Fig. 16 H. H. Richardson, Crane Library, Quincy, 1880-1883, Plan (Dover Publications, Inc.).

ピラミット型の屋根を頂く階段塔が、その異形の左右の均衡点となることから理解される (Fig. 13)。ただし、これが左右相称を崩したものであるとしての「イレギュラー・シンメトリー」という図式からは相当に隔たるところに至る同州モルデンのコンヴァース記念図書館 (1883-1885) への展開をも示していることは疑えない。ダウニングとの比較で説明するならば、形態上は大きな家のようなものであるウィン図書館とエイムズ図書館は、興味深くも、*The Architecture of Country Houses* の中で唯ふたつ「イレギュラー・シンメトリー」の例として挙げられたノーマン・スタイルおよびイタリアン・スタイルのヴィラの公共建築物への発展として理解できるが、ウィン図書館とノーマン・ヴィラとの類似はともかくも、エイムズ図書館とダウニングのイタリアン・ヴィラとの立体的相異は大きい。少数の単純化された構成要素から成るエイムズ図書館の立体としての非相称と比べれば、ダウニングが「イレギュラー・シンメトリー」と呼んだものは、立面として描かれる静的で図式的な左右の非相称以上のものではない。

ウィン、エイムズ両図書館の不必要なまでに高い階段塔や、概してリチャードソンの建築における非相称には批判的な研究者も高く評価するクインシーのクレイン図書館 (1880-1883) こそ、ふたつの図書館での経験はおろか、これまで論述した米国公共建築における非相称形態の展開を無視しては、十分にその歴史的価値を認識し難いものである。ラフ・スケッチとして残る初期の案は、クレイン図書館がエイムズ図書館に類似の平面と、ウィン、エイムズ両図書館よりも明確に階段塔を中心とする「イレギュラー・シンメトリー」の立面をもって構想されていたことを示す。その階段塔は三連アーチの入口部ではさらに小さな「イレギュラー・シンメトリー」の一部でもあり、リチャードソンには、これが極く自然な構成法となっていたことを窺わせる (Fig. 14)。最終的にリチャードソンは、長短ふたつの棟が交差する基本形式を保ちながらも、彼の図書館としては初めて、短い方の棟を平面上も立面的にも長い方の棟に納め、巧みに分節

されつつ連続する統一的空间と、単純な外形にも十分にその分節と統一とをともに表す意匠に到達した (Figs. 15, 16)。ダウニングのシンメトリーにとっては物理的事実として必要だった建物全体を支配する視覚的中心が、ここでは、従来の大きな塔が必要なだけの規模に縮小された階段室として、象徴と言うよりもむしろ痕跡として存在するが、それでも、左右の書庫と読書室とをそれぞれ直截に表す横長と縦長の連続窓を主要構成要素とするファサードの均衡点として残る。クレイン図書館には、その小さな階段塔以外にも、「イレギュラー・シンメトリー」の痕跡がいくつか在り、それらが全体の均衡に相当な役割を果す一方、その建物を斬新な構成と歴史的詳細の奇妙な混成物としている。だが、それらの詳細をも含め、すべての外的構成要素が無意味な形式性を課すことなく、内部に直截に応じながらも確実な均衡を取るこの建物は、その汚点とも見える痕跡を残させた「イレギュラー・シンメトリー」が理想とした、建築におけるロマンチズムとクラシズムとの止揚の一形態であり、ここに装飾的水準から建築的水準へと移行した、近代公共建築における非相称の構成の嚆矢を見ると言うてよい。

5. 結 論

本論を結ぶ前に、以上のようなリチャードソンの建築における非相称と当時の英国のクィーン・アン・リヴァイヴァル、殊にリチャードソンの作品に影響を与えたと考えられるリチャード・ノーマン・ショー (第I部参照) のそれとの相異を記しておく必要がある。その両者がお互いの作を知っていたこと、特にショーの仕事のリチャードソンが図版等を通じて早くから知っていたであろうことは疑い難い。しかし、リチャードソンが初期の装飾的な非相称から、より建築的な非相称へと、段階的發展を示したのに対し、ショーの建築における非相称は、最初から再び相称の形態が時代に迎えられる晩年まで、それが装飾的なものか否かを問わせぬほどに、自然で多様な形で現れた。その中には唐突なものもあるが、多くは建築的な質に結び付き、単に装飾的な非相称は見つけ

難い。それならば、19世紀の英国に生まれ、歴史が作り出した相称と非相称の混在する環境に育った建築家ならば最初からできる仕事に、リチャードソンは永い年月を費して到達したのかと言うと、そうではない。リチャードソンのクレイン図書館のように、あくまでも建築的思考を積み重ね、厳密な均衡を達成した、大胆な非相称は、ショーの建築には見出し難い。

積極的にせよ消極的にせよ、何らかの「自然」または「偶然」と、美的にあるいは美と機能の関係論上、結び付けられてきた非相称の建築物でさえも、リチャードソンは徹底的に「設計」し尽そうとした。翻って記すならば、それこそリチャードソンの非相称の限界でもあった。一見、不規則な形態でありながら、その構成要素の一部たりとも動かさぬほど、徹底的に設計された建築物は、建築の一理想形態ではある。だが、ルネサンス以来シンメトリー等の図解に多用された両腕を相称形に拡げた人間像と別な姿勢を取った人間とがともに静的世界に属するように、リチャードソンの非相称も、限界を伴う理想だったと思われる。

リチャードソンは、事実、クレイン図書館以後、彼の死までの数年間に、その非相称をさらに展開してきたわけではない。1880年代の仕事でも非相称的構成が頻りに試みられ、ハーヴァードのオースティン・ホール(1881-1883)等の場合は、大胆な非相称形態がいくつも検討されたが、実施までに、より無難な構成に変更された。この階段室の突出や窓割りにおける左右の微妙な相異を大規模な非相称の痕跡として残す建物よりも、同じ校地にすでに建てられていたセヴァー・ホール(1878-1880)のように、ほぼ完全に相称的な建物のほうが、リチャードソンの作品として高く評価されたのは、再び強まる古典的傾向のためばかりではない。大胆かつ厳密な非相称で完成されたクレイン図書館は、ウィンそしてエイムズ図書館と、連続した類似の計画での試行の積み重ねにより可能となった、まれな例なのである。

以上に論述した非相称的構成を含め、リチャードソンの建築の19世紀末そして20世紀初頭の欧州および北米の新しい世代への影響は、すでに知られている以上に大きい。アメリカでの1870年代末からの直接の影響には、むしろ破壊的側面もあり、リチャードソンの試行の意味を理解しない「イレギュラー・シンメトリー」の公共建築物が北米各地に無数に建てられた。しかし、この

ような否定的側面があるにもかかわらず、何らかのものや環境を設計するという意味を考えた場合、リチャードソンが非相称をもあくまでもデザインしようとしたことは、すでに論証したアメリカの「イレギュラー・シンメトリー」との脈絡において、特に歴史的重要性を有する。

1880年前後のリチャードソンの作品に至る過程で、アメリカ建築における非相称的構成は、由来の異なる諸要素の一つのものに複合しても良いという着想の段階から、近代の多様でイレギュラーな機能的要求を均衡のとれた建築という美的要請において満たすという段階にまで至った。19世紀のアメリカ建築は、この過程において、シカゴ派そしてライト(第I部参照)らによる歴史様式からの分離独立を前にして、基本的なデザインの主体性を確立したと思われる。

註

- 1) 旧ポールディング邸“Knoll”は、1865年に再びDavisによって増築され、“Lyndhurst”となる。“Knoll”については、A. J. Downing, *A Treatise on the Theory and Practice of Landscape Gardening*, New York, 1841, その他の版を参照。
- 2) S. Sloan: *The Model Architect*, Philadelphia, 1852, Vol. I, 48. “Norman Architecture”についての解説(pp. 46-48)および“Norman Villa”のデザイン(pp. 49-52, pls. XXXIX-XLVII)参照。
- 3) 両端の重症患者棟のみ方向を異にしていた。北東端からの3病棟は1969年に取り壊され、現在は一部のみ使用される。S. Sloanによる同類の精神病院との関係については、H. Fujita, *AMERICAN DESIGN IN THE NINETEENTH CENTURY, Architectural Expression 1838-1880*, 208
- 4) Photograph Album: X 75 M-7(51). リチャードソン系のShepley, Bulfinch, Richardson, and Abbott, Inc.によりホウトン図書館に寄託されている。
- 5) 諸案の検証は、ホウトン図書館 R. Wick 氏の協力による。
- 6) アメリカン・イクスプレス社屋の上層はマソニック・ホールとして使われていた。M. G. Wheelockによるボストンのマソニック・テンプルとともに、その用途類型との関係も興味深い。
- 7) E.-É. Viollet-le-Duc: *Entretiens sur l'architecture*, Tome 1er, Paris, 1863, 478-491
- 8) H.-R. Hitchcock: *The Architecture of H. H. Richardson and His Times*, Cambridge, 1966 (1st edition, 1936), 165, 199 etc

SYMMETRY AND IRREGULARITY**PART II DEVELOPMENT FORM “IRREGULAR SYMMETRY”**

—A Study of architectural composition in nineteenth century America—

by **HARUHIKO FUJITA**, M. Sc., M. Arch., Ph. D., Kyoto
Institute of Technology, Member of A. I. J.**DEVELOPMENT IN THE FORMATION OF “IRREGULAR SYMMETRY”**

Once a formula for “irregular symmetry” was devised, it spread widely. For example, at least two facades of the Masonic Temple built in Boston by M. G. Wheelock in 1867 showed “irregular symmetry” (Fig. 1). The Philadelphia Masonic Temple built by J. H. Windrim in the same year shows another type of “irregular symmetry”, perhaps resulting from Masonic mysticism reinforced by the Victorian interest in novelty and variety. Though “irregular symmetry” in educational buildings usually resulted from symmetry being overlaid on a complex architectural program, it was sometimes used on simpler buildings such as the Free Academy of Rochester, New York, by A. J. Warner (1872-73). The corner pavilions of the Academy are topped by varied roof forms, irrespective of the symmetrical potential of the program (Fig. 2). These examples suggest an “irregular symmetry” almost as simple as Downing’s, though for larger structures. Part II of this series treats a development from this ornamental asymmetry to a more architectural one.

THE SPREAD OF ASYMMETRY IN AMERICAN PUBLIC ARCHITECTURE

Asymmetrical form, particularly irregular symmetry, which had been limited to educational and religious buildings in the 1840’s was used for other public buildings in the latter half of the 19th century. “Irregular symmetry” of the Smithsonian Institution was among the major sources of inspiration, not only for educational edifices but for court houses and other public buildings. Edwin May, who designed a number of public edifices in Indiana, seems to have been much affected by the Smithsonian building, as seen in the vague traces of influence found in the Decatur County Court House (1854-60), and the stronger influence apparent in the Knox County Court House (1872-76). In Pennsylvania, Samuel Sloan designed a number of asymmetrical public buildings, but he tended to use “irregular symmetry” as technique to produce a variety of designs from a few basic plans. For example, the asymmetrical Venango County Court House (1868-69) is a mirror image of Clinton County Court House (1867-69) (Figs. 3, 4). Asymmetrical design was used throughout the late 19th century on court houses, including H. H. Richardson’s Hampden County Court House in Springfield, Massachusetts, as well as on other public buildings. In Springfield, for instance, an asymmetrical City Hall (1854-55) by Leopold Eidlitz was added to an old Court House in the Greek Revival style, an architectural mode formerly dominant in American public architecture.

“IRREGULAR SYMMETRY” IN THE WORK OF H. H. RICHARDSON

Although the Hampden County Court House is the oldest existing example of Richardson’s “irregular symmetry” in this context, his project for Brookline Town Hall (1870) is most representative of his involvement with the idea as defined by Downing, the balance of irregular parts (Figs. 5, 6). This became a basic model of his later work, such as the administration building of the New York State Hospital in Buffalo (1872-78), for which he designed at least two asymmetrical facades (Figs. 7, 8). He also experimented with asymmetrical designs on the west elevation of Trinity Church in Boston. In both Buffalo and Boston, Richardson finally chose a symmetrical design, but seems to have worked through a number of “irregularly symmetrical” forms at early stages of most of his designs.

FROM ORNAMENTAL ASYMMETRY TO ARCHITECTURAL ASYMMETRY

The period between the design of the Chicago building for the American Merchants’ Union Express Company (1872) and the Cheney Building in Hartford, Connecticut (1875-76) shows a transition in Richardson’s work,

from ornamental asymmetry to a more architectural asymmetry. Although like the American Express Building, the Cheney Building was designed based on a formula for "irregular symmetry", with a gable roof on the northern corner pavilion and a pyramidal roof on the southern pavilion, the gable roof was finally omitted and the dominance of the more important south-west corner was architecturally established (Fig.9). This is far beyond the stage of "variety for variety's sake" or "irregularity for irregularity's sake". In the field of theory, Viollet-le-Duc played an important role in the establishment of non-classical architectural principles such as the "principe de pondération" which can be free from the limits of classical "symétrie" (Fig.10). The Ames Town Hall of North Easton, Massachusetts (1879-81), with its huge tower at the foot of the building, shows Richardson's understanding of architecture on an inclined site, on which the principle of balance works far better than the law of symmetry (Fig.11). Although these asymmetrical designs by Richardson were heavily criticized by H.-R. Hitchcock for being mere pictorial embellishment, we should not fail to notice trials in asymmetrical composition, aimed at modern irregular requirements, by such medievalists as Viollet-le-Duc or Richardson.

A maturization process in Richardson's architectural asymmetry can be observed in his series of designs for local libraries built in New England around 1880. The first of them, the Winn Library in Woburn (1876-79) is a highly picturesque High-Victorian structure with such prominent features as a tall tower or octagonal museum, although his French training is shown in its disciplined axial plan (Fig.12). This was followed by the Ames Library (1877-79) of North Easton, smaller and simpler in design than the Winn Library, but with a staircase tower which still works as the physically dominant fulcrum of the whole composition (Fig.13). The Crane Library (1880-83) of Quincy evolved from the Ames scheme (Fig.14), but with an extremely simple plan (Fig.15). The staircase tower, formerly a central feature of the composition, was reduced to a small turret with the main facade of the library asymmetrically balanced around it, reminiscent of an "irregular symmetry" formed by academic discipline rather than by free romanticism (Fig.16). The Crane Library remains as a milestone in the dialectic evolution between classicism and romanticism in Western architecture.

CONCLUSION

There is little doubt that Richardson was affected by the so-called "Queen Anne Revival", and by British contemporaries such as R. N. Shaw, well-known for asymmetrical and picturesque work. Though Richardson may have lacked the refinement in which Shaw excelled, he deliberately tried to design boldly irregular or asymmetrical buildings, which were formerly a product of accident and introduced into Western architecture principally for accidental or informal beauty. It is difficult to find asymmetrical buildings among Shaw's work which were as studied and academically disciplined as was the Crane Library. This attainment in Richardson's architecture seems also to have been its limitation, as a beautiful human figure taking a specific pose actually belongs to the same world as the Vitruvian figure, stretching arms and legs to reach a square or circle, representing the classical ideals of architectural beauty. However, while still retaining the historical concern for visual balance and beauty, Richardson did attain historically significant resolution of functional requirements and aesthetic concerns on the basis of 19th century American architecture evolved through "irregular symmetry".